



八王子でローカルに活動中!

花崎 晶 / はなざき・しょう
女性相談カウンセラー & ヨーガ教師、八王子市民講座ほか

都 心から電車で西に約1時間、多摩川を越えると一気に山並みの控える緑の盆地が広がる八王子。高尾山・陣馬山など森林が市の46%を占め、農地も、多摩ニュータウンの一部を含む住宅地、市街地もある広々とした地域。ここで七歳になる娘を育てている。震災と原発事故で、頼りになるのは市民メディアと運動の繋がりと再確認し、地域で活動を始めた。二年前はほとんど知り合っていない仲間と、「八王子市民講座」と名付けて脱原発や自然エネルギーをテーマに講座を開催し、そのなかで市民の放射能測定室や福島の子どもを定期的に合宿に招くグループも生まれた。最近では、市民の発電事業をめざすプロジェクトや、互助的に時間を循環し合う地域通貨「てんぐ」を始めた仲間もいる。憲法問題では、組合や護憲・平和運動を地元で粘り強く続けてきた人たちとも出会えた。

も奏効するがそれだけではないだろう。もう、あふれる情報に振り回されても仕方がない。詐欺まがいの政治や金持ちの儲け話ばかり繰り返され、その理不尽への怒りに「頭」が忙殺されながらも「胸」の思いは塞がるばかり。口(言葉)と手足(行動)がうまくつながらず全身の循環を得ない。そんな混乱を、私や私の世代はしぶん前から感じてきたと思うし、今の若い人はもっと素早く体感し、身の置き所を求めている。心理カウンセラーなんて、やなぎのの仕事が食い扶持の一つになった。だがとりわけ女性の胸の内を聴いてきたおかげで、世間体も暴力も凝縮する彼女たちの物語を辿る対話の中で、私は自分の循環も回復させてもらった気がする。今は仕事の合間に、子連れ・自転車で会議へ。デモに行くなら八王子で毎週続く「金八デモ」へ。アパートの庭でとれる梅で今年も梅干を作る。地元の農家に野菜で協力してもらい、手作り上手な仲間が季節のジャムを煮て、活動カンパを作る。そんなローカルな運動で未来を語りながら、少しずつ世界に繋がっていけないかな、と。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 21 2013.08.01

- 02 Relay Essay ポコポコ② 八王子でローカルに活動中! ©花崎 晶
- 03 [特集] 変貌する世界と民衆交易が切りひらく未来
「民衆交易」は今の世界にどう向き合うのか ©大野和興
人がモノを作る社会を ©伊藤幸蔵、フェアトレードは誰のもの? ©鈴木隆二、
「これからや」の店先から ©東由香子
- 8 [村井吉敬さん 追悼]
小さな民からの発想 — 村井吉敬が歩いた世界
- 10 [Column]
Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記③ カカオ生産者と加工チームの挑戦 ©津留歴子
マイストーリー in ジャパン⑥ 【スリランカ】ヒマージャ・ルクシャーニさん
微笑みの国から③ マイベンライの底力 ©平河 夏
アジア現代文学 あれこれ③ 『七〇年代』 ©大橋成子
- 12 撮っておきアジア② 番外編 インドネシア、パプア ©村井吉敬
- 13 APLA 食堂① コーヒーゼリー&マスコバド糖ドリンク ©赤石優衣、大久保ふみ
- 14 [Voice from APLA partners]
【東ティモールより】ATTに新しい仲間が加わりました!
【北部ルソンより】北ルソン・マラピン渓谷のBMWプラントを訪ねて
- 15 事務局だより

表紙のことば

学生時代に旅行したアジアのいくつかの国々。カンボジアでは友だちと遺跡を巡ったり、また別の機会には村で民泊をしたり。その時の移動手段はもっぱらオートバイの後ろに載せてもらうというものだった。村々ではお母さんたちがこのような柄の布をスカートのように腰に巻いている姿をよく見かけたものだが、もうあれからすでに20年。この20年の間に、フィリピン・ネグロス島の村の姿は、すっかり様変わりした。当時は日本からの連絡は、町にある事務所に電話かファックスを入れ、村への伝達はそれを人が伝えに行くという方法だったが、今は電気の通っていない村でも携帯電話を持っている。カンボジアの村で泊めていただいたあの家、村の学校、今はどのような姿になっているのだろうか。(赤松結希)

特集

変貌する世界と民衆交易が切りひらく未来

日本に初めてネグロス島の無農薬バナナが輸入されて25年。砂糖危機と飢餓という「コト」が起こったことが発端となり、自立への基盤として「人から人へ」つながるマスコバド糖やバナナという「モノ」が生まれた。この新しい事業は「民衆交易」と名づけ

支える豊かな北」という構造を根本的に壊した。こうした動きに対して、産直運動やフェアトレードの現場で活動する方々の協力を得て、『ハリーナ』は改めて「民衆交易」の意義をとらえなおす作業に取り組み、連載していく。(編集部)

「民衆交易」は今の世界にどう向き合うのか

大野和興 / おおの・かずお
農業ジャーナリスト、本誌編集委員

最近インタビューを受けた『SPA』という週刊誌が掲載誌を送ってきた。「年収300万円以下、低所得者に共通するダメ習慣」という特集をしている。年収300

とある。つまり普通なのだ。生活全般にわたって聞き取りをしているが、そのうちの「食事編」をみると、「気がつけばラーメンばかり」「人気はすき家の焼きそば牛丼」「炭水化物ばかり」「早食い、噛まない」「激甘飲料で気合を入れる」「野菜ジュースを毎日飲んでる俺は勝ち組」「友だちと居酒屋にいったら腹いっぱい食べる」……。

同じ頃に株オルター・トレード・ジャパン(ATT)も生まれた。まだ社会が今のようには壊れる前の80年代「少しくらい高くても買える」中流層が分厚く存在していたことはすでに述べた。「フェアトレード」ではなく、「民衆交易」という言葉を使っているのは世界広しといえどもATTだけだと思

世界のとらえ方

盛期のころだった。「少しくらい高くても安全なもの」という言い方が流行った。まだ社会党(若い人のために念のため、今の社民党が元氣だった時代で、その活動家も同じことを言った。「お前までそんなこと言うなよ。少しくらいでも高いと買えない人が買えるようにするのが社会党の任務だろう」とどやした。それから20年、社会党はほとんど壊れ、安全な食べ物でも「少しくらい高くても買えた」中流層がやせ細り、今また安倍バブルで踊り出した一握りの上層1%と、焼きそば牛丼で腹をたくもかく満たす99%の圧倒的多数層に分かれてしまった。

田正彦さんが言いだし、広めた言

葉であると、ぼくは思っている。試みにグーグルで「民衆交易」を引いてみたら24万余りが検索された。とりあえず冒頭の数十をざっと見てみたら、そのすべてがATJとAPLA(旧JNC)を含め、その事業や活動をサポートしている生協などの活動に関するものに行き着いた。ちなみに「フェアトレード」をグーグルすると58万7000件がヒットした。世界にあまねく広がるフェアトレードの半分だから、民衆交易の健闘ぶりはいしたものである。

ではなぜATJはフェアトレードではなく民衆交易なのか。このことを問い出すと、一冊の本を書かなければならないので、ここではスルーする。とりあえず本棚を探して以前読んだ『フェアトレード』(1998年、新評論社)というタイトルの本を探し出しめくってみた。著者のマイケル・バラット・ブラウンはイギリスの研究者兼実践者である。分厚い本なので序章だけめくってみると、フェア(公正)な交易を考えるキーワードは「イコール・エクステンジ(等価交換)」らしいということがわかった。これこそが交易における正義なのだ

という。「等価」があるということは「不等価」がある。というより、この世の中ではまず「不等価」があって、それを正すための正義が「等価」なのだという組み立てになっている。

では、その「不等価」はどこで発生しているのか。経済学の教えるところによると、不等価交換は工業製品と一次産品の交換において発生する。工業製品は先進国(北)でつくられ、一次産品は第三世界(南)で産出されるから、この不等価交換は「北」と「南」の間に及ぶ。「豊かな北」と「貧しい南」という交易が生んだこの構造を正す、いかえれば「等価」にする交換のあり方こそがフェア(公正)トレードということになる。

この世界のどらえ方は、フェアトレードも民衆交易も同じだと思える。ATJという民衆交易資本をつくり、その市場を造成した生活協同組合や社会事業体を構成するのは、豊かになった日本を象徴する中間層(中流)である。「南」の貧しい人々を助け、農業や添加物を使わないで生態系にも優しく作ったバナナやエビなら「少しくらい高くても買う」人たちだ。この

資本と市場に支えられてATJと民衆交易は順調に伸びてきた。

小さく、小さく

フェアトレードや民衆交易がとらえた世界は今やどこにもない。大学出の30代半ばといえど70年、80年代なら二人くらいの子どもがいて、郊外に家をつくり(もちろんローンだが、ローンが組めた)、妻は専業主婦で生協などの社会的活動に生きがいを見つけ、生き生きと飛び回っていた。しかし今、彼女たちの生きがいを支えていた「豊かな北」と「貧しい南」という枠組みはグローバル化の波に壊れ、北も南も1%と99%に分解した。かつての彼女たちと同じ世代の若者が、今ではスーパーの野菜売り場で、今夜のおかずのために捨てられたキャベツの外葉を拾っている。

世界を牛耳っているのは一握りの巨大な多国籍資本であり、国家は彼らが暴れまわって起こした世界金融危機の後始末役にしか過ぎず、財政の大盤振る舞いで金融危機を乗り越えようとして国家そのものの破綻を引き起こしている。ヨーロッパでもアメリカでも日本

でも「豊かな中間層」は消えつつある。この状況を切りぬけようと、資本の側は国家を従えながらより一層のモノ・カネ・ヒトの自由化を進めようとFTA(自由貿易協定)やTPP(環太平洋経済連携協定)に躍り上がっている。この先にあるのは金融危機と財政危機のいつそうの深化だろう。流浪する世界経済の行き先は誰にも見えない。

この世界に民衆交易はどう向き合うのか。民衆交易だけではない。生活協同組合も社会事業体も様々な社会運動も、同じ問いを突き付けられている。つい先日(5月21日)ぼく自身やAPLAも参加する市民グループ「TPPに反対する人々の運動」の連続講座で、池袋で三代続く豆腐屋さんの話を聞いた。かつて2000店あった東京の豆腐屋さんは今500店に減った。そのなかで生き残ったのは小さく小さく、大豆や作り方に気を配りながらやってきたからだという。そして「みなさん、どうか小さな店で買ってください」と呼びかけた。足元からもう一度始め直す時代なのだ、と話を聞きながら思った。■

農

業の現場に限らず、今、本當につらいのは「作る人がいなくなった」

ことではないだろうか。昔は「作ること」がそのまま経済やモノの対価につながっていたが、今やサービスや為替などが経済を左右する。それが「国はお金があっても人びとは貧乏」という構造をつくってしまった。農家の場合、後継者不足の一つの理由は、所得の問題以外に、作る楽しみを失くしてきたことにあると思う。「やってみる」ことが受け継がれていかな時代に入り、本来は楽しいから行動するのに、今は動いても楽しみを感じられず魅力がないから若い人たちが元気がないのだろう。しかし、行動するのは楽しい一方で、理念を受け継ぐ人たちが育つたとはいえない。このことは農家だけではなく、フェアトレードの実践者や生協や社会全体でも同じことが言えるのではないかと。こうした状況に違和感を持っている若い人たちもいるだろう。ただ、それをどう実際の行動に移していかわからないし、移し方も自分で決めかねている、というあやふやなところに社会全体が置かれている。だからこそ今、「こう

伊藤幸蔵 / いとうこうそう
米沢郷牧場 代表

人がモノを作る社会を

いう世界めざそう」と旗をふって行動を起こし、実態をつくっていくことが必要だと思う。

「買う」と「作る」を近くする

フェアトレードも日本の産直の形も少しずつ変わるだろう。今はモノを作る経費がかかりすぎ、産直産地が価格を下げられず、まともなモノを作っているところほど長生きできなくなっている。これを避けるためには、支援ではなく、お互いに何が大切かということとを共有していくことが今以上に重要だ。生産者も、売上は増えないかもしれないが、これまでのように産直の関係におんぶにだっこではなく、自分たちらしい地域づくりを成り立たせていくという責任が発生してきていると思う。消費側にしても、例えば生協などは、販売量を増やせば、自分たちがめざすことが実現できるからと拡大してきた。しかし、最近では「何が大切か」を見直し、組合員



にもう一度近づき、組合員と同じ目線、組合員主導に戻そうとしている生協も出てきている。本来は「買う」と「作る」が限りなく近くなればよいわけで、そのための緩衝剤として生協の役割があると思う。こうした機動性のある生協の姿に戻していこうという動きもある。僕たちは今後そういうところと一緒にやっていきたいという思いがある。

豊かさについての再確認を

現在の状況を考えると、いくら新規就農の人が増えても農地はも

たないだろう。だからこそ、農村を人が集まれる、寄れる場所にしていかなくてはならない。日本は戦後、作る世代を地方から収奪して経済成長させてきた。今それを世界規模でやるうとしているのがTPPであり、結局日本自体が過疎になりつつある。これまでは、年寄しかおらず、地方に活力・購買力がなくならず、中央にだけ購買力が集中する構造だったが、今度は都市も過疎化する。地方にいる俺らより苦しくなるだろう。しかし幸運なことに、日本にはまだ自然が残っている。環境資源はいっぱいある。その豊かさを再確認すれば、それほど不幸にならないかもしれない。一方、アジアは自然と共存する要素を残しつつも、日本より確実に大きな格差を抱えたまま経済成長をすすめているから、もっと悲惨なことになりかねない。日本がたどった道を進まないためにもAPLA/ATJはこれまでバナナをもらって来た人たちに、逆に日本の経験を伝えていくことが必要だ。フィリピン経済が突っ走っている今、例えばカネシゲフアームをきちんと継続して、別の道を提示し続けていくことが大切になると思う。

経済的に自立し、かつ理念やプライドをもって未来に向かって自分たちの仲間を増やしていきたい、

と考える若い層が、バナナ産地やアジア各地で登場する契機を創るために、APLA/ATJが果たす役割は今後さらに求められると思う。

昔のように「買って売ったらそ

東

京の渋谷の地にフェアトレードショップを立ち上げてから17年。当時の渋谷でフェアトレード(あるいは民衆交易、草の根貿易)という言葉を知る人は皆無であったが、時を経て12年の全国意識調査では実に4人に1人がフェアトレードを認知するに至った。最近では教科書や受験問題に「フェアトレード」という言葉が出てくることも珍しくなく、平成生まれ世代の認知率は昭和世代をはるかに上回る。「フェアトレード」を当たり前のように理解している世代の出現、認知度の上昇。そこだけを切り取る順風満帆なシーンに感じるが、自分が20年近くかけて様々な出会いによって育んだフェアトレードと認知されてきた「フェアトレード」がいささかかけ離れた感が拭えないでいる。

渋谷で感じるグローバルゼーション

店を立ち上げた当初は「やりた

の人たちが幸せになる」という時代は終わったのだから。(インタビ

ューまごめ・吉澤真満子

〔注〕フイリン・ネグロス島にある循環型農場で2009年からは若者のための農業研修と農民学校を実施している。

鈴木隆二 / すずきりゅうじ
〔南〕ぐらする一つ代表取締役

フェアトレードは誰のもの?

んな小さな店が多い街だったか、古いビルから新しいビルに変わるとつれて、そんな店がどんどんなくなっていく。そして新しいビルにはどこにもあるチェーン店、体力のある企業が入ってくる。仕込みを自ら行うようになっていない店や、個人商店や小規模な会社はほとんどなくなり、「やりたいことをやっていこう」と考える人にとって窮屈な街となった。渋谷に限らず街ごと・地域ごとに顔色が違っていていいはずだが、どこも同じような居酒屋、スーパーやデパートがあって同じものが並ぶ。均一だから、早い、安い。「いいねいさ」が阻害され「ありがとう」という言葉がまず登場しない。これこそが渋谷で日々感じるグロー



バリゼーションの姿なのだが、そのグローバルゼーションの果実の受け入れ方次第で、フェアトレード親はかなり変容するのではないだろうか。

「手し」ことがもつ希望の光

コーヒー、紅茶、チョコレート。これらグローバルに流通する商品を通して、世界でも日本でもフェアトレードの認知は高まってきた。しかし、フェアトレードのもうひとつの顔である「手しこと」「伝統技術×天然素材」がもたらす価値観——そこにこそ持続可能な生き方・暮らし方のヒントが詰まっている——への理解はまだまだだ。自分たちがかわるフェアトレードの作り手や生産者の多くは、自分の手を使って仕事をし、生活している。もちろんどの国・地域も日本いや渋谷と同じようにグローバルゼーションの波にさらされて、仕事や生活の有り様は変化の真只中ではあるが、自分の手を使って生業をまっとうしようとしている。手しことを生業として認めなくなってしまう今の日本にとって、そんな作り手や生産者がいることに思いをめぐらせることで、



ぐらする一つの店頭。

我々の生活の有り様も十分に変わっていくのではないか。彼ら彼女らが行う生産活動は世界にとっての希望の光だと感じている。

「私たちは与えられたものをただ消費するだけの不自由な存在ではない」。これはフェアトレードを通して自身が学んだことの一つだ。今までは「フェアトレードは生産者のためのもの」と語られることが多かったが、生産者のみならずマージンナライズされ分断された99%がつかがり、より自由に生きていくためのものなのだと思う。欧米では認知率が50%を超える国はいくつもあり、フェアトレードがグローバルに浸透した結果として日本の認知度が高まったと見ることもできる。しかし、グローバルゼーションの風が吹くこの時代、様々なフェアトレード団体・フェアトレードショップ、そして市民の協働の積み重ねが、「4人に1

人」まで積み上げられたことを評価したいと思う。そしてここから先は、フェアトレードや民衆交易のストーリーを通して「いいねいな暮らし」「感謝のできる生活」

と

んなに古くてもかわらないので、賞味期限切れの〇〇酢はないでし

「ようか?」と何人かのお客さんに聞かれました。〇〇酢は生協や自然食品店を中心に流通している酢です。「3・11以前に収穫された原料で作られている酢がほしいんです。原料が国産なので放射能が心配だから。昔の原料で作られた賞味期限切れのを探してるんです」とのこと。「原発事故が終息したようなことを言うし、原発の再稼働をすすめているし、知らぬ間に放射能に汚染されたものを子どもに食べさせているのでは」と心配されているお母さんたちと話しながら、胸が痛くなりました。小売店なので、どうしても賞味期限切れが出ます。それを私は「期限切れでもいいのに……」とブツブツ言いながら、自家消費をしてみました。期限切れが真剣に求められるなんて、考えてもみませんでした。「不安だと思っけど、被災地の食品で自主的に検査をして安全を確かめているものがある

を積み上げていきたい。■

〔注〕一般社団法人フェアトレードタウン・ジャパン2012年3月フェアトレードと倫理的消費に関する全国意識調査を実施。
http://www.fairtrade-town-japan.com/

東 由香子 / ひがし・ゆかこ
環境友好雑貨店 これからや

「これからや」の店先から



し、札幌には市民検査室もあるよ。まず確かめよう」と話しながらも放射能・遺伝子組み換え・TPP……この国の食の安全性と職の安定性を考えると、ちゃんと確かめた「確かなもの」を売っていいの、この先どうなるんじゃ!?! こっちも不安になります。

血の通ったものを売りたい

1991年から環境雑貨の店「これからや」を営んでいます。人通りの多いところにある店ではありません。お客さんも少ないので、食品の仕入れは少量ずつでも対応してくれる製造元や卸メーカから仕入れさせてもらっています。食品の生ものは、毎月1回入荷するバランゴンバナナだけで、他は加工品です。できるだけ作り

手がわかる安全な原材料の食品、合成洗剤のアイテムの多さに対抗してそろえた各種せっけん類、フェアトレードの手工芸品や食品が、狭い店頭と並ぶ小さな雑貨屋です。2Fスペースの一部はNPO法人ほっかいどうピーストレードの事務所が貸しています。毎週1〜2度ですが、故越田清和事務局長も通い作業をしてみました。来ると必ず店に寄り、お茶や梅干し等の買いいものをしていました。「無理しなくていいよ」と言う、「いいんだ、必要な物だから。市販のものより高くても、ちゃんと作っているものの方がいいから」と言い、全くとお金持ちではないのに買っていました。ケチるお金がないからケチらないのかもしれないけど。



これからやの店内。

お金の余裕のない私たちですが、例えば印刷を頼むとき、ネットで安いところを探すのではなく、私たちの運動に共感してくれる印刷屋に頼んできました。一度も肉声を聞かず、顔を合わす事がない取引関係ではなく、顔を合わせて相談しあえる関係の方がいいに決まっているからです。フェアトレードは運動であり商売です。安くてもいいものを売ってお客さんに喜んでもらえるから「あきない」なのはわかるけれど、安さ競争に巻き込まれたくない。買いたたいて商売はしたくない。血の通ったいいものを売っていききたいのです。そう、TPPではなく、今こそF TPP II フェアトレード・ピースフル・パートナーシップを目指したい。

「傷んでくるのに、高いバナナだなあ。見た事ないものばかり売って、商売になってるのかい?」などと町内会のおっさんに冷やかされたりしますが、「食べべから言っつてよ、衝撃のうまさだから。じゃえじゃえだから」と、わけのわからないことを言って売りつけたりします。フェアトレードだ、オーガニックだと、クドクド説明しなくても、食べたり使ったりして実感できるうまさや安心がある「確かなもの」が店には必要です。■



見えないアジアを歩く

見えないアジアを歩く編集委員会編著
三一書房 2008年

夕 グラス・ラミスさん(元米軍沖繩駐留海兵隊員で、その後、ベトナム反戦運動に加わった)に、ある時、「マージナル・マン(ウーマン)とは、どんなイメージか」と聞いたことがある。

「端や縁のほうにいるけど、スックと立っているカッコイイ人」というような答えが返ってきて、思わずニンマリした記憶がある。「マージナル」ということが気になっていた頃である。英和辞典を見ると“marginal”とは「へり(縁、端)の、(問題など)周辺の、あまり重要でない」などがある(研究社『新英和中辞典』第5版)。南北格差の問題や開発の問題を論じていると、marginalizationということばがよく出てくる。周縁化とか周辺化と訳されている。わたしは「しわ寄せ」と訳している。

中央の大きな力・権力の推進する開発のしわ寄せによって割り食うのが、周縁化(marginalization)なのである。

しかし、逆さまに考えるべきではないか。marginalにあること自体カッコいい、そこにある(いる)ことこそ価値がある、そう思うべきでないだろうか。辺境・周辺・縁、それこそが世の中の中心である。少なくともそこに住む人は、自分が縁にいるとは、本来は思っていない。知らぬうちに中心とやがて形成され、知らぬうちに縁に追いやられてしまっただけのことである。

私たちの立場は、新ODA大綱に述べられている国益主義ではない。狭隘な経済利益追求主義でもない。アメリカの進めるグローバルな自由市場経済や対テロ戦争でもない。ODA50年を期して私たちがつくり出したこの本は、これまでの日本のODAのあり方を深く自省するところから始まった。その自省とは、実は援助を受ける多くのアジア・第三世界の「普通の人びと」から私たちに届けられた声に端を発している。債務のつけを負われ、あるいはODAの犠牲になってきた人びとの立場から日本のODAを振り返ろうという立場である。

ODAの全体益からすれば多少の犠牲はやむを得ない、とする「主流派」開発論者がたくさんいる。しかし、「多少の犠牲」というなかで、住まいを奪われ、生業を失い、ときには負傷し、命までも奪われた人びとは、たくさんいる。それでも仕方がないとしたら、人間としての対話は成り立たない。

独裁政権や軍事政権が借りた債務を、なぜ、いまを生きる「普通の人びと」が負わなければならないのか。債務ゆえに、教育費や医療費が削られ、グローバル化ゆえに食べるものさえつけれない現実を前にすると、私たちはODAの根本的な変革というより、根本的な思考変革をしなければならないのではないかと考える。



徹底検証ニッポンのODA

村井吉敬編著
コモンズ 2006年

20年ほど前、わたしは「日本人は輸入エビを少し食べすぎではないか」と書いた。いまそのことをまた考えてみたい。日本の食料自給率はますます低下し、40%を下回った。エビは10%以下である。環境面でも、労働の現場から考えても、食の安全性から見ても、やはりエビは輸入に頼り過ぎているのではないか。エビ問題の将来を展望するため、自然循環型の東ジャワ・シンドアルジョの養殖池を起点に、ここではフェアトレードの可能性を考えてみたい。



エビと日本人II

岩波新書 2007年

【村井吉敬さん追悼】 小さな民からの発想 村井吉敬が歩いた世界

抵抗のナショナリズムには、確かに「正義」を主張できる基盤が濃厚にあった。毛沢東やホーチミンやスカルノの顔を思い浮かべれば、よほど皮肉に考えないかぎり、やはり彼らは正義を担ったのだと思っても不思議はない。

それでも、なおかつ問題が残る。ひとつは、想像された共同体の構成メンバーからはずれてしまった人やグループの存在だ。海の民バジャウが正確にそうかどうかは十分に検証されるべきだが、陸上民や定住農耕民とかなり異なる集団が、バジャウであったり、熱帯林の中に住まう移動焼き畑農耕民や狩猟・採取民だったりする。日本の中世史でも、こうした移動民の存在の意味が最近、重視されるようになってきた(たとえば、網野善彦氏の仕事)。海民、移動民、狩猟採取民などは多くの場合、ネーション・ビルディング(国家建設)から疎外されてきた。この人たちの立場から、近代国家(帝国主義であれ、旧植民地新興独立国家であれ)はあらためて相対化されるべきではないか。



サシとアジアと海世界

コモンズ 1998年

相手の手を握った自分の手を心臓の上に持ってきて、掌を自分の胸にあてがう。これは、相手の祝福の心を我が心にとどめ置くというイスラームの作法である。村井さんの仕草は、本当に深く市井の人びととも暮らしたことで身についたものだと思う。あの

村井先生のこと

堀田正彦/ほった・まさひこ
(株)オルター・トレード・ジャパン顧問

ここで村井さんの市井のしきたりな交渉術が生きてくる。なに、ひたすら無関係なことをしやべり、とぼけるのである。東ジャワのブンガワンソロの河口では、

へりくだり方は尋常ではない。どんな村の老人も意気盛んな親方ももちろん偉そうな政治家や役人も、村井流の挨拶を受けるとほとんどに「ヘンヤヘンヤ」になってしまうのだ。もちろん挨拶に続いて流暢なインドネシア語が続くので人びとはさらにうれしくなり、なんと大学の先生様だと聞いて、ますます自分が偉くなったように楽しくなってしまうのである。1991年の5月、環境を破壊しないエビの養殖池を探して、村井さんと一緒に、スマトラ島の先端から、ジャワ島東端のブンガワンソロ河までを一週間で駆け抜けたことがある。アチエ州の地主さんたちはマングローブの林を伐採して、シングガポール備長炭の炭焼き窯をこしらえ、伐採の跡地に手掘りの池をくりぬいてここでエビを養殖するから買えというのである。

ハジ・アムナンというエビ養殖農に出会った。彼は一目で「プロフェサ・ムライ」の虜になった。アムナンさんは名言を吐いた。「私のこの池は未来の子孫から預かっているものだ。集約型の養殖でこの池を破壊したら、未来に對して申し訳が立たない」。彼の池で育った無給餌、自然養殖のエビが「エコシユリンブ第一号」となったのである。村井流の挨拶がなければ、アムナンさんは私たちにエビを売ってはくれなかっただろう。エコシユリンブの誕生秘話である。仕事というものは伝染する。私も挨拶の仕草だけは「村井流」である。だが、インドネシア語は未だに身についていない。村井さんには先立たれてしまった。已んぬる哉。自分、インドネシア語は身に付きそうもない。■



ヌサンタラ航海記

村井吉敬・藤林泰編
リプロポート 1994年

南 スラウェシのピラ海岸ではびっくりするほど大きな木造船を造っていた。かつて二本マストの秀麗なピニシ帆船がバンダ海、アラフラ海を疾走していた。その伝統はまだ生きている。こんな船で多島海の島から島を旅してみたい、その時見た夢だった。十年前のことである。十年前の旅でナマコやサゴヤシや鍛冶屋や織り姫たちとも出会った。船旅の夢は膨らんでいった。

強 権、急激な開発、そして貧困、このなかで多くの人々は“人間的であること”を求めて苦闘している。スダルトタのマンガも、あくまでも“人間”のこの苦闘を哀感とユーモアと強者への皮肉を交えて描いている。ここに、ほっとしたユーモアがなければあまりに暗く、あまりに惨めだ。スダルトタがユーモアを恣意的に創り出しているのではない。民衆こそがユーモアをもって振舞わなければ惨めだからだ。

パシコムおじさん — マンガでみる現代インドネシア

G.M.スダルトタ著、村井吉敬訳
新宿書房 1985年



スندا生活誌 変動のインドネシア社会

NHKブックス 1978年

わたしはバンドン市やスダの農村に住みながら、人々が何を食べて、どんなところに住み、何に喜び、どんなときに笑い、何を怒り、何に悩

み苦しむのかが知りたかった。それを知り、理解することによって、わたしやわたしたち日本人のあるべき関わり合いを探りうるのではないかと考えたからである。

わたしはスنداで生活することによって知らず知らずのうちに、伝説の世界と物の世界のぶつかり合い、伝統と近代の接点、民衆と権力の相克、辺境と中心を結ぶもの、インドネシアと日本の関わり合い、といったことを考えていた。

ダヤンスンビヤニ・スリの妖しく、なまめかしい精霊が、いまなお揺蕩う(たゆとう)パラヒアンの二年間は、その精霊たちが、モノとカネと闘っている世界であった。わたしは、その闘いの結末を、またの日に、見に行くことになるだろう。

03

photo essay
from Thailand

微笑みの国から No.3

平河夏／ひらかわ・なつ
一児の母、タイ・バンコク駐在3年目

マイペンライの底力

タイ語の代表選手と言えば「マイペンライ」。直訳すると「大丈夫!」とか「心配ない」というところだろうか。タイの人びとは本当によく「マイペンライ」と言う。何か頼み事をした時、こちらが迷惑をかけてしまった時…。なかには自分のミスにもかかわらずメイドさんから「マイペンライ」と言われ腹が立ったという話も聞かすが、それはさて置き、私はこのマイペンライこそがタイの人びとを象徴している気がしてならない。

2011年の大洪水。この時、日本人社会は軽くパニックに陥った。情報を収集するにも言葉の壁が立ちばかり、日本大使館からの情報は悲しくも当てにならなかった。結果8割近い日本人が一時帰国を選択したが、私たち一家はバンコクに残ることを決め、英語を操るタイ人ドライバーからの情報を頼みに日々を送った。彼はことごとく「マイペンライ」と言った。洪水慣れしている彼の「マイペンライ」を鵜呑みにしていいのかわかると疑念を抱きつつも数週間後、洪水は収束した。被災地の映像では、泳ぐ人あり、人魚のコスプレあり、水に下半身浸かったままゲームする人あり……まさに「マイペンライ」であった。死傷者が出るなど、すべてがマイペンライであったはずはないのだが、私は、この言葉には何か計り知れない底力が潜んでいるに違いないと思っている。



ハンモックで眠る少女。

01

カカオ キタ
kakaokita

カカオ民衆交易奮闘記

3

津留歴史／つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員

カカオ豆の天日乾燥。

カカオ生産者と加工チームの挑戦

パプアでは4月からカカオの収穫期に入りました。カカオ・キタでは今季の買付をほちほち始めています。その買付に先がけて、日本で年初に販売された『チョココラ パプア』をカカオ村の人びとに届けました。村人はCocoa de Papuaとローマ字で書かれた板チョコを手の平に乗せまじまじと見つめた後、「これが私たちのチョココラ」とニコリ。味はどうですか?と聞くと、皆口を揃えて「おいしい!」。さて、ここまで和気あいあい、世界で初めてパプアの名が刻印されたチョコが販売されたことを喜んだのでした。そして次に、「では、今季の買付価格はいくら?」というシビアな話題に。コメや砂糖の価格が上がっているから、カカオ買付価格も上がるべき、

カカオ・キタのスタッフとカカオ村の人びとは同じパプア人、家族のような関係です。カカオ事業の進め方について、意見の違いやお互いの利害で口論することがあっても、一緒に問題を解決して先に進もうという気概を持っています。どうしたら売れる価格帯のチョココレートを作れるか、どうやって生産者により恩恵が生まれる構造がつけられるか、このことにカカオ・キタは頭を悩ませながら、トラックでカカオ村を回る日々が続いています。

04

アジア現代文学 Asian Contemporary Literature ARE-KORE | 03

『七〇年代』

ルアールハティ・パウティスタ [著] 柘谷哲 [訳]、めこん、1993年

大橋成子／おおはし・せいこ
本誌編集長

七〇年代、若者の時代。女性としての家族・社会と向き合う。著者は、マニラ最大の貧困地域といわれるトンド出身の女性で、タガログ語作家の第一人者といわれている。彼女の作品は社会的メッセージが強いにもかかわらず、ストーリーの中に庶民生活のリアリティが濃厚に描かれるため、多くのファンに愛されている。本書にも、70年代のマニラの様子や社会・政治状況が生き生きと描かれている。

1972年9月21日、マルコス大統領の戒厳令布告から、今年で41年目を迎えた。10年以上続いた戒厳令時代に、フィリピンでは何百万人に及ぶ人びとの人生が狂わされた。本書の舞台であるマニラの典型的な中産階級の家族に起こった出来事は、あの熱い政治の時代、どの家庭でも経験したであろう葛藤をまるで著者の実体験のように描写している。同時にこの物語は、つねに良妻賢母であろうとしたアマンダが、5人の息子と夫との関係に翻弄されながら、自らの人生を切り開いていく、女性への応援歌でもある。

必死に育ててきた5人の息子たちが成長しそれぞれの道を選ぶ矢先に、戒厳令が施行される。正義感の強い長男は大学を中退し、フィリピン共産党の軍事組織新人民軍(NPA)に合流。その後逮捕され、さまざまな拷問を受ける。次男は長男の生き方と

女の時代、若者の時代

02

マイストーリー ジャパン

日本に住む在日外国人たち 【第九回】



ヒマーシャさん。川崎にて。

スリランカ ヒマーシャ・ルククシャーニさん / Himasha Rukshani

聞き手・吉澤真満子 (P・T事務局長)

2008年4月に留学生として来日し、大学で電子工学を勉強しました。おじいさんがエンジニアで、ラジオを作ったり、色んなものを直しているのを見て手伝ったり、小さいころからモノを作ることが好きでした。その影響もあって、大学を選ぶときにはモノ作りをしたいという気持ちになっていました。しかし、スリランカには技術系の大学が3つしかなく狭き門です。試験に合格しても入れないこともあり、その場合、大学進学をあきらめて別の仕事について、海外留学という道を選ぶしかありません。留学費用が高いため両親に頼りましたが、母親が日本留学奨学生の案内を新聞で見つけ、それが縁で今私は日本にいます。スリランカは私が生まれた時から

内戦が続いており、住んでいたコロンボでもよく事件が起こりました。10歳のころ、大統領殿の近くに学校があったため、子どものふりをした人が鞆に爆弾を入れて持ち込むという噂が流れ、それ以降、子どもたちの通学用の鞆が透明になりました。学校から近所の銀行が爆破され煙が出るのを見ました。こうした内戦下の生活にも慣れていくのですが、日々危険と隣り合わせで心から落ち着くことはありませんでした。自分が日本へ来た時もまだ内戦状態だったので、家族の安否がとても心配でした。内戦が終わったことを聞いたときは心から安心しました。内戦終結に不満を持つ人も一部にはいますが、平和になって本当によかったです。今、スリランカは少しずつ発展してきています。内戦時に壊された道路などの建設が進み、帰国するたびに変化を実感します。ただ、今スリランカに戻っても技術系の仕事はあまりないので日本の企業に就職しました。まだ経験も技術も浅いので、国に貢献するには未熟ですが、将来はスリランカへ戻り、今働いている会社の支部を開設し、技術系の仕事に就きたい人たちの働く場を創れるようになれたらいいな、と考えています。

APLA 食堂

Kitchen APLA

01

今日の
レシピ コーヒーゼリー &
マスコバド糖ドリンク

レポーター 赤石優衣 / あかいし・ゆい
大久保ふみ / おおくほ・ふみ
APLA事務局

APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、「誰でも簡単に作れる」レシピをお届けします。

今回は、夏まっ只中な今に ぴったりの2品!

コーヒーゼリー

つついコーヒーを淹れすぎてしまった……。そんな経験はないでしょうか? 捨てるのはもったいない! 美味しいコーヒーを別の形で利用したい! そんなときにどうぞ。

【材料】

- コーヒー 300cc (温かいままでOK)
- ゼラチン 5g
- 水 50cc



【作り方】

1. 水にゼラチンを入れてふやかす。
2. 温めたコーヒーに1.を加え、混ぜながら溶かす。
3. お好みの器に入れ、粗熱を取ってから冷蔵庫で数時間冷やし固めてできあがり!

※砂糖を入れずに作っているので、お好みでマスコバド糖黒みつや生クリームなどをかけると美味しいです。

マスコバド糖ドリンク

夏になると、熱中症にかかったり、体調を崩しやすくなります。そんなとき、栄養ドリンクの代わりにおすすめのドリンクです。マスコバド糖は、含蜜糖なので、カルシウム、カリウム、ナトリウム、マグネシウム、マンガン、リン、亜鉛、鉄、銅といったあらゆるミネラルが豊富! さらにビタミンB1やB2ばかりでなく、ナイアシン、パントテン酸などのビタミンB群がバランスよく含まれています。水にも溶けやすいマスコバド糖をつかって簡単ドリンクをどうぞ。

【材料】

- マスコバド糖 大さじ1
- ゲランドの塩 ふたつまみ
- 柑橘系の果汁 30cc
- 水 200cc



【作り方】

1. グラスに、材料を全て入れ、混ぜて溶かしてできあがり!

今回の雑学

汗をかいたら水分だけではなく塩分も摂取したほうが良いというのは現代ではよく知られていますが、昔は、下痢や嘔吐が原因の脱水症状で命を落とす人(特に子どもや老人)がたくさんいました。そこで生まれたのが、経口補水療法(ORT: 下痢などによる脱水症を抑えるため、ぶどう糖と塩、場合によっては栄養分を調合したもの)。最初は、ひとつまみの塩とスプーン1杯の砂糖を水に溶かしたものを与えただけでしたが、たったこれだけで、水分の吸収力が良くなり死亡率が減りました。

飲みやすい栄養ドリンクなどが市販されてい

ますが、マスコバド糖ドリンクは程よい甘さで、体に染みこんでいくのがわかります。実は、私もこのドリンクの愛飲者。ちなみに、以前は、某製薬会社の栄養ドリンクに大変お世話になっていましたが、今では、後味が良く、ちょっとした不調も治してくれるマスコバド糖ドリンクのほうが好きです。

下痢や嘔吐を無理に薬で止める方法もありますが、このようにシンプルに作って飲むほうが、体にはいいのではないかと思います。ただ砂糖と塩だけでは全然おいしくないなので、果汁を入れるところがミソ! 簡単に作れるので、熱中症予防や水分補給にお試しを!

撮っておきアジア

Totteoki ASIA

番外編

21

撮影者◎村井吉敬/むらい・よしのり

撮影場所◎インドネシア、パプア



『パプア—森と海と人びと』(めこん、2013年)

1993年以降、20年間にわたってパプアを歩きつづけた村井吉敬さんのパプアの人びとの深いつきあいの記録である本書には、200枚以上の写真がカラーで収録されています。今回は、ご家族の了解を得て、収録されていない写真から選んだ5点をお届けすることができました。なお、村井さんは闘病中に執筆・校正をされ、この本の完成を見届けた直後の3月23日に逝去されました。



このコーナーでは皆さまの写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA事務局(Tel: 03-5273-8160)までお問い合わせください。皆さまからの応募をお待ちしております!

編集後記

「民衆」や「交易」という表現は、普段の生活ではもはや使うことのない死語のようなものだが、あえて今の時代にこの言葉がもつ意味を再発見しよう、という思いで今号の特集が組まれた。大野和興さんの提起に続き、山形・渋谷・札幌から送られてきた原稿は、期せずして、「確かなモノづくり」の大切さをそれぞれの立場から問いかけている。今後もこうした議論を深める企画を本紙上で継続していきたい。会員・読者の皆さまの投稿も大歓迎です。(大橋)

コラム・マイストーリー in ジャパンに登場して下さったヒマーシャさん。彼女が学生の時、私の母親の英語の先生だったことが伝手でインタビューを受けてもらった。今年から日本の企業に就職し、インタビュー後には、次週に控えている新人歓迎会で披露する劇の練習があると帰って行った。実直でまじめで、でもチャームングで。機械の部品を設計するのが楽しいと話した彼女。いつかはスリランカに貢献したいと話すが、女性で働く人はそんなに多くないらしい。なんだかとんでも眩しく、ぜひ頑張ってほしいと心より思った。(吉澤)

特集記事(8～9ページ)の準備のために自宅にある村井先生の著書をかたっぱしから引っ張り出した。『スندا生活誌』から亡くなる直前に上梓された「バブアー森と海と人びと」まで貫かれている「小さな民からの発想」に改めて触れ、つつい作業を忘れて読み入ってしまうことも。紙面の関係で本当に限られたものしか掲載することができなかったことが残念ではあるが、これを機にぜひ他の著作も手にとってみてほしい。(野川)

ハリナ HALINA

2013年8月号 vol.02-no.21
2013年8月1日発行

【編集長】
大橋成子

【編集者】
吉澤真満子、野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

事務局の動き(2013年5月～8月)	
5月 11日	東京・渋谷のUPLINKでフェアトレード月間イベントとして開かれたドキュメンタリー映画『世界が食べられなくなる日』の先行上映+トークショー「世界フェアトレード・デーを考える・未来を考えるために知っておきたいTPPのこと」に吉澤が参加しました。
5月 15日	ATJ、JIM-NET(日本イラク医療支援ネットワーク)、アーユス仏教国際協力ネットワークと共同で進めているカカオクッキーの開発のため、福島県いわき市のいわき学園を吉澤が訪問しました。
5月 11日～17日	東ティモールへ野川が出張しました。
5月 15日	恵泉女学園大学で赤石が授業を行いました。
5月 18日	第6回総会を開催。
5月 22日	恵泉女学園大学で再度赤石が授業を行いました。
5月 25日	恵泉女学園大学・スプリングフェスタに参加しました。
5月 26日	東京朝市・アースデイマーケットに出店しました。
6月 12日	福島県西白河郡泉崎村にある社会福祉法人こころん、次いで二本松市の同朋幼稚園、二本松有機農業研究会を、秋山、疋田、吉澤、赤石が訪問しました。
6月 13日	バナナ募金でバナナを届けている福島県福島市のあすなる保育園、福島こひつじ幼稚園を秋山、疋田、吉澤、赤石が訪問しました。
6月 13日	アジア学院へ秋山、吉澤、赤石が訪問しました。
6月 18日	武蔵大学で吉澤が授業を行いました。
6月 22日～30日	フィリピン(ネグロス・北部ルソン)へ秋山、吉澤が出張しました。
6月 23日	フェアトレード月間イベント「いいね!フェアトレード いい? TPP」@国分寺カフェスローを他団体と協力して開催しました。
7月 22日～8月 1日	フィリピン・ネグロスに吉澤が出張しました。
7月 24日～30日	オルター・トレード社(ATC)25周年式典行事に秋山が参加しました。
7月 25日～8月 1日	グリーンコープ主催青少年ネグロス体験ツアーが開催され、吉澤と赤石が同行しました。

事務局からお知らせ

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へ引き続きご協力をお願いいたします。

いくつかの保育園、幼稚園から卒園前に園児の皆さんよりお礼のメッセージが届きました。バナナ募金のホームページもリニューアルし、写真でお礼の手紙や絵が見られるようになっています。
●2013年5月現在、19施設、約1400人の子どもたちへ届けています。

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- 5月29日PreTICAD国際シンポ&市民社会ラウンドテーブル
- オスプレイNO!「普天間基地即時閉鎖、辺野古やめろ、海兵隊いらない」沖縄第4期意見広告を!
- モザンビーク・プロサバンナ事業に関する国際共同声明
- 日印原子力協力協定に向けた交渉停止を求める要望書
- TPP交渉に関する市民参加の説明会開催ならびにパブリック・コメント実施の要請
- 友産友消1万人チャレンジ(呼びかけ団体)
- 日本ブラジル原子力協定反対の団体署名

From East Timor【東ティモールより】

ATTに新しい仲間が加わりました!

コーヒー生産者グループの地域に通って、協同組合への発展を視野に入れた「協働」を進めサポートする、コーヒー以外の作物の栽培アド

バイスをする、そんなスタッフを探していたところ、Permatil(パーマティル)のエゴ・レモスさんの紹介で、素敵な2人がオルター・トレード・ティモール社(ATT)の仲間に加わることになりました。



メノさん(左)とパウラさん(右)。

バイクで各コミュニティに通うことになりました。これまではディリで友だちとハウスシェアをして暮らしてきたそう。「長らくボーイ・スカウトに関わってきて、グループをまとめたり導いたりすることには慣れているので、何か力になれるかもしれない」とATTでの仕事に意欲的です。ちょっと強面ですが、穏やかな語り口のメノさんです。

アナ・パウラ・シメネス(通称パウラ)さんの方は、大学で農業について学び、その経験を生かして、Permatilの活動に長く関わってきました。公務員として働いていた経験もありますが、今は自宅近くの学校で週2回ほど理科を教えるボランティアをしているとのこと。「APLAのような外国の仲間たちが東ティモールのことを思っているから、東ティモールの自分たちが動かなくてどうするの!」と小柄な身体とは対照的な力強い言葉がポンポン飛び出してきました。そんな彼女、小学1年生

From Northern Luzon【北部ルソンより】

北ルソン・マラビン溪谷のBMWプラントを訪ねて

6月下旬、標高700～900mの山間にあるマラビン溪谷は、どうに雨季になっていないはずなのに、真夏そのものであった。この溪谷に

は、遙か西の海拔2000m以上のコルディエラ地方から移住して来た先住民の人びとの美しい農村が広がっていた。

彼らは豊富な鉱物資源を狙う多国籍企業の侵略を許さず、柑橘栽培と稲作中心の農業で暮らそうと決断している。特に特産品の柑橘類は彼らの重要な収入源だ。しかし、これまで皮の厚い柑橘にしか出なかった虫害が、今年は温州ミカン(現地ではサツマと呼ぶ)に始まった。柑橘農家のリーダー



BMWプラント前で。左から4人目がギルバートさん。

であるギルバートさんは、「なぜサツマにも虫害が発生し始めたのか、その原因は特定できていないが、どうにか克服したい」と語る。

ギルバートさんからは、この虫害が問題になる前から、柑橘栽培にBMW技術を活用したいとの願いがあり、昨年プラントを建設した。フィリピンでは、生産者自身が管理

(APLA事務局・野川未央) ■
【注】パームカルチャーをベースに、東ティモールにおける持続可能な農業の実践を広めるために、農民や青年を対象にしたトレーニングなどを実施しているNGO。

運営する初めてのプラントである。
マラビン溪谷の山向こうにある広大な平野は、遣伝子組み換えコーン畑で埋め尽くされつつある。それと異なる有機栽培をめざし、健康な土壌作り、健康な柑橘生産のために、BMW活性化水による栽培実験を開始したギルバートさんとその仲間たち。今回開催した「BMWとは何か」、「カネシゲファーム・ルーラルキヤンパス(KFR)の循環農業実践例」のセミナーでの彼らの真剣な学びが柑橘栽培に活かされ、この異常気象と虫害を克服していく力になることを願いつつ、桃源郷のようなマラビン溪谷を後にした。
(APLA共同代表・秋山真兎) ■
【注】BMW技術(バクテリア(微生物)・ミネラル(岩石鉱物)・ウォーター(水)の略)は、バクテリアとミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。